研究論文

日本文学文化についてのインターネット利用の国際間の共同授業

International Collaborative Class on Japanese Literature and Culture

板坂則子*　高橋龍夫*　西野　強*　松永賢次**
*専修大学文学部
**専修大学ネットワーク情報学部

Abstract: In the Major in Japanese Literature and Culture at Senshu University, a project entitled " International Collaborative Class using Internet "has been carried out. Its three educational purposes are as follows, 1) giving the students to have interest in both classic and modern literature and culture, 2) giving the students to know how Japanese literature and culture are accepted outside Japan, 3) encouraging the students to use various software and hardware concerning collaborative classes. Among many attempts, we discuss the achievement of real-time collaborative classes between the students of the Major in Japanese Literature and Culture at Senshu University and the students of Japanese studies at two foreign universities, i.e., Dankook University in Republic of Korea, and the University Ca ' Foscari of Venice, Italy. After these classes, it is found that they helped the students to develop a global point of view and an interest for web communication capabilities. This satisfies present aims of this project.
Keywords: distance learning,international, internet,Japanese Literature and Culture

1．はじめに

日本文学文化をめぐる研究は平安時代以来の長い歴史を持ち，豊かな日本固有の文化を育んでいる．しかしながら現代において，国際化と情報化の視点から見る限り，その取り組みは遅れていると言わざるを得ない．特に古典文学文化ではこの傾向が増大する．専修大学の日本文学文化専攻（日文専攻）学生における問題点を具体的に見ると，

① 日本文学文化を，世界への普遍性を持ちにくく，外国からは理解されない特殊なものであると考える傾向がある
② 外国語アレルギーを持つ者が多く，外国の文学文化に関する知識が少ない
③ 発表時に紙媒体のレジュメのみに頼る傾向があり，効果的なプレゼンテーションへの配慮が少ない

などがあげられる．そこで日文専攻として，次の方向を推し進めることとなった．

① 古典を特別視せず、現代の世界的な文学文化に繋がる発想を育てる
② 国際化の視点を持たせる
③ 情報処理機器の利用を推進させる

2．「国際間のネットワーク利用共同授業」の試み

上記の問題点を克服するために「国際間のネットワーク利用共同授業」を企画した．

活動はインターネットを用いた日本文学文化に関わる国際間の授業を中心としたもので，具体的には

① ネット授業
　ア．海外の大学に所属する日本文学文化研究に携わる教員による「遠隔講義」
　イ．専修大学日文専攻学生と海外の大学で日本学を学ぶ学生とが共同で行う「リアルタイム共同授業」
② 日本文学文化アーカイブ

日本文学文化に関わるコンテンツを作製して授業で活用し，中心的な部分を短縮版

Noriko Itasaka*, Tatsuo Takahashi, Tsuyoshi Nishino and Kenji Matsunaga
Senshu University
*E-mail: nitasaka@isc.senshu-u.ac.jp

（受付：2005年7月2日，受理：2005年10月1日）

にして日本文学文化紹介としてネットワーク上で配信する

などの試みであるが，これらはすべて日本文学文化を対象とし，日本語を基本言語として用いている．本稿では①のイ．「リアルタイム共同授業」の中から二つの試みを中心に取り上げる．

３. リアルタイム共同授業までの経過

（1）大学内の動き

「国際間のネットワーク利用共同授業」は今回の共同研究者を中心に，日文専攻所属教員全13名の他にネットワーク情報学部所属教員３名を構成員として立案した．また，情報処理機器に関して情報科学センター等からのサポートを受けた．

（2）学生間の動き

ネット授業の進行と平行して，2004年６月に学生組織「ネット授業研究会」を発足した．これは学生たちが情報処理機器の使用に慣れ，自らの手で操作できるスキルを身に付けることを目的として希望者を募ったもので，2004年度のメンバーは日文学部生34名，同院生３名等から構成された．研究会の活動として院生，情報科学センター職員などによるPC講習会を９月～12月に計28回，延べ参加人数364名の規模で行い，Word，Excel，PowerPointの基本ソフト，画像処理（Photoshop他）やネット会議ソフト（LiveOn他）などの基礎知識や機器の操作技術を徐々に習得した．2005年５月発足の2005年度メンバーは日文学部生38名，同院生７名等で，前期のPC講習会も前年度より内容を深めて行った．研究会で技術力を深めた学生達は，次第にネット授業における機器操作要員としても働くようになっている．

４．リアルタイム共同授業

海外の大学と専修大学，双方の学生が共同で授業を行うリアルタイム共同授業は，現在，韓国・檀国大学（鄭教授指導）とイタリア・ヴェネチア大学（Moretti講師指導）との間で行っている．これはインターネットで双方の教室を繋ぎ，ネット会議ソフトでリアルタイムの動画と音声を互いに送り，事前に学生達が授業テーマに添って作製したビデオとプレゼンテーション画像とをシンクロさせた授業コンテンツを用いて,共同で授業を行うもので,日本語を基本言語としている．授業に備えて相手国の文学文化に関する知識を得ることも含めて，ネット授業本番までに通常は２,３回の準備授業を持ち，さらに授業時間外の活動によって学生達は授業コンテンツを作製する．また国や時間帯によって回線状況が甚だしく異なるため,本番までに２～５回程度の接続実験を行って使用ソフト類を決定している．本稿では以下に二つの授業例を掲げる．共に板坂ゼミにおける授業記録である．ゼミは所属学生２，３，４学年を合わせてほぼ50～60名，江戸期の日本古典文学文化を研究対象に，活発な活動を行っている．

（1）檀国大学との共同授業

①　授業までの軌跡

2004年１月から数回に亘って，専修大学と檀国大学を結んで，ビデオ会議システムや数種のネット会議ソフトを用いた機器接続実験を試行錯誤のうちに行った．それと

６月８日	元ゼミ留学生の趙　賢姫さんによるレクチャー「韓国の文学と文化」開催.
９月１日	専修大学生７名が檀国大学を訪問し、ネット授業参加予定の檀国大学生と交流.
９～10月	ゼミの４グループがそれぞれ「恋文」をテーマに授業コンテンツの案を練る.
11月２日 ～ ５日	各グループで授業コンテンツを作製，編集作業（MCG，Content Author　Presto使用）を行う.
11月12日	両校を結び，複数のネット会議ソフト（ITS、LiveOn他を使用）を用いた最終実験を行う.

平行してゼミでは授業に向けての準備を進め，檀国大学からの提案を受けて，授業テーマも「恋文」と決定した．

② リアルタイム共同授業「恋文」

11月16日に韓国・檀国大学との間でリアルタイム共同授業「恋文」を実施した（図１）．

図１ 共同授業「恋文」 専修大学教室風景

機器は２種類のネット会議ソフト（LiveOn、Bizmate）で両校を繋ぎ，合わせて10面の画像を用い，正面の大型スクリーンの他に教室内のディスプレイを用いて映像を流した．

授業の進行は，以下のように行った．なお，使用言語は基本的に日本語，ただし双方の教室に通訳ができる留学生を配した．参加学生は専修大学42名，檀国大学10名であった．

・導入（挨拶と自己紹介） …10分
・檀国大学生の授業コンテンツ鑑賞 …16分
　ア．新羅時代の郷歌と『土佐日記』の和歌の比較
　イ．『源氏物語』と『ノルウェイの森』における恋文
　ウ．手紙，その愛の形
　エ．『つぐみ』の手紙
・専修大学生からの質疑と応答 …５分
・専修大学生の授業コンテンツ鑑賞 …17分
　ア．現代のラブレター小説
　イ．『薄雪物語』の恋文（図２）
　ウ．『源氏物語』の恋文
　エ．現代日本恋文事情
・双方の学生による討論 …10分
・双方の教授によるレクチャー…14分
　「日本古典文学と仮名の実用性」（鄭）
　「日本文化の中の手紙と恋の伝達」（板坂）
・学生による感想と提言,挨拶…17分

図２ 専修大学コンテンツ「薄雪物語」

（2）ヴェネチア大学との共同授業

① 授業までの軌跡

イタリアとを結んで，ゼミでは2004年６月８日にヴェネチア大学Moretti講師による遠隔地授業「『竹斎』考…多様性と滑稽性」を作った．この授業の後も，「ネット授業」用BBSを用いて学生たちとMoretti講師との間で話し合いを継続して持った．

10～11月	ネット会議ソフト（LiveOn，PowerLive他）の接続実験を行う．
12月８日	Moretti講師による大人数を対象とした遠隔授業「イタリアにおける日本文学文化研究」が行われる．ゼミ生も約半数が聴講．
2005年	ヴェネチア大学を担当教員が訪問し，ヴェネチア大学生の授業コンテンツ収録．授業テーマ「異文化が語り合う場」を決定．
５月25日	ゼミで４グループによる授業コンテンツ用ビデオ収録とコンテンツ作製．
６月１日	ヴェネチア大学とのネット会議ソフト最終接続実験．

②　リアルタイム共同授業「異文化が語り合う場」

６月７日にイタリア・ヴェネチア大学とのリアルタイム共同授業を開催した．

使用機器はネット会議ソフト（LiveOn）を用いて両校を繋ぎ，６面の画像を開いて，正面の大型スクリーンの他に教室内のディスプレイを用いて映像を流した（図３）．使用言語は基本的に日本語，ただし専修大学側でヴェネチア大学生が１名，通訳として特別参加した．参加学生は専修大学42名，ヴェネチア大学20名．

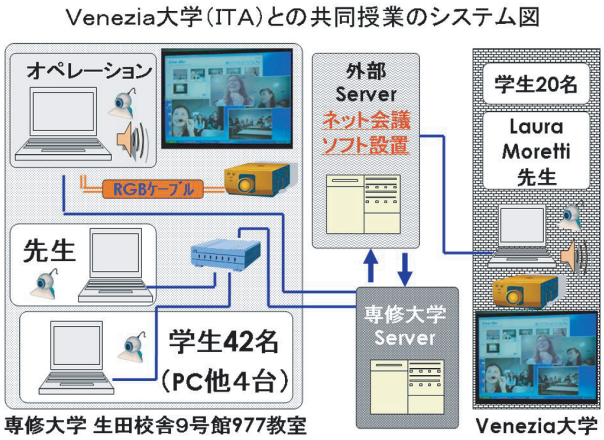


図３　「異文化」授業使用機器

授業の進行は，以下のように行った．

・導入（双方の挨拶と授業紹介）…10分

・ヴェネチア大学生の授業コンテンツ鑑賞（専修大学生からの質疑応答を含む）…39分

ア．「日本文学文化への興味」など（図４）

イ．「わたしの日本文学文化研究テーマ」など

・専修大学生の授業コンテンツ鑑賞（ヴェネチア大学生からの質疑応答を含む）…31分

ア．現代に於ける日本とイタリアの文化交流

イ．江戸時代と現代の文化…衣食住について

ウ．歴史的に見たイタリアと日本の文化…オペラと歌舞伎

図４　ヴェネチア大学コンテンツ「日本文学文化への興味」

エ．東京町案内（上野・浅草・神田・新宿・専修大学）

・双方の教員によるまとめ　…７分

・双方の学生から挨拶　…３分

５．「ネット授業」の影響

海外の大学との共同授業についての学生たちの感想は，新鮮な驚きと反省に満ちている．韓国やイタリアの学生たちの日本語レベルの高さと研究熱心さを感嘆し，自分たちのコンテンツが「わかりやすさ」「かわいらしさ」に傾いて現実との対決を避けていたことを発見し，改めて自らの母国である日本文学文化への誇りを自覚した学生が多い．彼らの変化はその他にも様々な面で見られる．

（1）ゼミアンケート

2005年５月にゼミで行ったアンケートでは，

A　日本の文学・文化について

B　日本文学・文化と国際性について

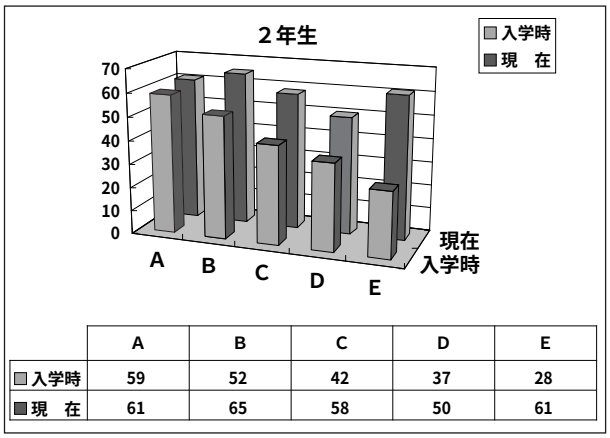
C　情報機器（PC関連）について

D　外国人とのコミュニケーションについて

E　発表時のプレゼンテーションについて

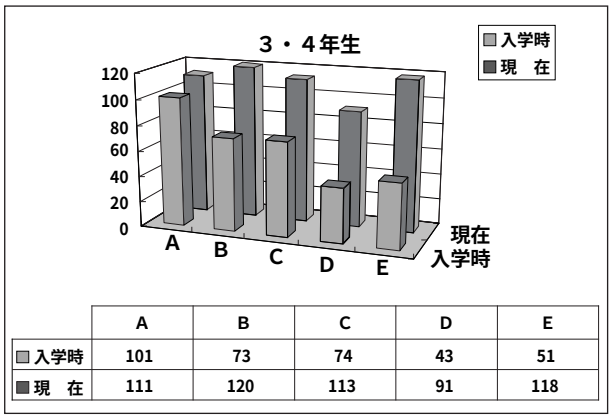
の５点について，この時点では「ネット授業」未経験で準備作業中の２年生と，「ネット授業」を既に数回経験している３，４年生に分けて尋ねた．それぞれの項目において，入学

時に比べて現在（５月）では大きな意識の変化が見られ，「ネット授業」の影響を見ることができる．図５と図６は変化の指標として，アンケートの各項目の四つの選択肢の中で，最も期待される選択を最高得点（４点）に，以下，各選択を得点化したものである．



	A	B	C	D	E
入学時	59	52	42	37	28
現　在	61	65	58	50	61

図５　アンケート結果　２年生



	A	B	C	D	E
入学時	101	73	74	43	51
現　在	111	120	113	91	118

図６　アンケート結果　３，４年生

アンケートの個別の結果を見ると、「ネット授業」を経験することによって我が国の文学文化への誇りを持ち，その国際的な普遍性を感じて外国人にも理解しうるものと考え，彼らとより積極的な交渉を望むようになっている．また，情報機器の使用にも意欲を持ち，プレゼンテーション技術を磨きたいと考えている．すなわち，問題提起された「国際的な視野」の開発、そして「情報機器への関心」の増加が顕著に見られ、「古典文学文化」を現代とは隔離された特殊なものとは考えなくなっているのである．

(2) その他の試み

学生たちは授業のかたわら，コンテンツ作成の技術を活かして「日文専攻紹介2004」コンテンツCDを作製したり，附属高校とをビデオ会議システムで繋いだ交歓会で自らの体験を語り，海外の大学生とも交流を重ね，活発な活動を行っている．2005年後期には「ネット授業研究会」メンバーが四つのグループに分かれて「番組企画」コンペを企画しており，その成果を生かして「日文専攻紹介2005」コンテンツを2005年冬には作製予定である．

６．おわりに

私たちの行った授業は様々な応用の期待できるものである．今回は国際間の試みとなったが，日本国内の数カ所を結んでの授業や，学内の数カ所，時には違う学部を結んでの授業や討論も可能である．日本の伝統的な文学文化を現代の視点から捉え直すことで、文学と社会との関わりなど、新しい側面から日本文化の特徴を考えることもできる．授業のみならず，学生達が自らインターネットやコンテンツCDの作製等を通じて様々な情報発信を行うことにより，プレゼンテーション技術も確実に向上した．

機器面では，今回は市販ソフトに頼ることが多かったが，必ずしも取り立てて高価なソフトが必用というわけでもない．フリーソフトや簡単なホームページ作製ソフトを用いてもコンテンツの作製は可能であり，メッセンジャー機能があれば，インターネットによる相互発信は世界規模で行える．工夫によって多くの可能性が生まれると信じる．

関連URL

ネット授業http://www.isc.senshu-u.ac.jp/~ thb0457/

本計画は，文部科学省「サイバーキャンパス整備事業」（平成15年度～）に採択されている．